

無限のスキルゲッター!

mugen no skill getter

2

毎月レアスキルと大量経験値を
貰っている僕は、異次元の強さで無双するの



maruzushi

まるずし

illustration

中西達哉



イザヤ

『剣聖』の称号を持つ青年。剣技において彼の右に出る者はいない。

スミリス

『聖女』の称号を持つ少女。勇者パーティの良心。

テツルギ

『大賢者』の称号を持つ青年。気さくなムードメーカー。

登場人物紹介



リノ

ユーリの幼馴染み。妙に感覚が鋭いことを除けば、普通の心優しい少女。



メジェール

伝説の称号『勇者』を持つ少女。ユーリにただならぬ力と運命を感じ、行動を共にする。



フィーリア

ユーリの住むエアスト国の王女様。なぜかユーリを慕っている……病的なまでに。



フラウ

どこか抜けているエルフの冒険者。テンションが上がるとすぐ気絶してしまう。

ソロル

凛々しいアマゾネスの女戦士。ユーリの強さに惚れ込んで仲間となる。

ルク

伝説の幻獣『キャスパルク』。モフモフで可愛い見た目だけど超強い。

ユーリ

神様の娘を救ったお礼に毎月倍々の経験値を貰えるようになった本作の主人公。無限の経験値とスキルでのんびり最強を目指す。

第一章 アマゾネス村

1. 守護天使誕生

僕、ユーリ・ヒロナダは一度死んだことがある。

凶悪なドラゴンによって命を奪われた女神様を救うために、『神授の儀』という儀式を通じて授かったスキル、『生命譲渡』サクリフアイスを使ったのだ。

『生命譲渡』は自分の命を犠牲にして、他者を生き返らせるという能力である。一生に一度しか発動できない超レアスキルを使った僕は、その代償として死んだ——はずだった。

だが、女神様の父親……つまり神様の計らいによって、僕は奇跡的に生き返った。しかも、毎月倍々の経験値をもらえると、素晴らしい加護付きで。

最初は1しかもらえなかったのだが、月日が経つごとに経験値はどんどん増えていって、今では億を超える経験値を授かっている。

僕にはさらにもう一つ、ありがたい加護を授けてもらった。毎月一度だけ、ランダムに出てくる超レアスキルを経験値で取得できるというものだ。

この二つの加護を活用して際限なく強くなれるようになった僕は、悠々自適な冒険者生活を送る気でいたんだけど……とある事件によって大きな戦いに巻き込まれてしまう。

謎の存在——恐らくその正体は悪魔であろうヴァクラーズとセクエストロ枢機卿に、愛する母国エアストを奪われたのだ。

ひよんなことから行動を共にしていた僕と、幼馴染みのリノ、エアストの王女であるフィーリア様は辛くも彼らの魔の手から逃れた。

こうして、僕らの逃亡者生活が始まったのだった。

国を脱出する前、僕は牢に投獄されていた。しかし幸いなことに、アイテムボックスは所持者本人にしか開けないので、捕まっても中身は没収されなかった。

おかげで、想定外の事態で野に飛び出したにもかかわらず、サバイバルに困ることはない。冒険者活動に使う必需品は、一通りアイテムボックスに入れてあったからね。

残念ながら『炎の剣』などの装備していたものは全部没収されちゃったけれど、それは仕方ない。念のため予備の装備を持っていたので、現在僕たち三人はそれを身に着けている。

『炎の剣』をもう一度作るとは可能だが、それには大量のMPを消費するので、今は作るのを保留にしている。いざというときに、MPがないと困るからだ。

ちなみに、お金に関してはかなりの金額を持っている。ただ、こんな状況ではいくら持っていても無意味だな。せっかく稼いでおいたのに……

とりあえず、差し当たつての問題は食料だ。

一応、携帯食はたくさんあるのだが……まあ美味しくない。栄養は問題ないんだけどね。

それと、真夜中に適当な方向へ全力で逃げ出したので、自分たちが今どこに向かっているのかも正確には分かっていない。

危険を回避するためにも、自分たちのいる場所を把握しておきたいところ。

日の出の位置などから推測するに、隣国アマトーレの方角へ向かっている……と思う。

エアストはこの世界の最南東に位置する国で、その北にはファープラ国、北西にカイダ国、そして西にアマトーレ国が存在している。

アマトーレは一応エアストから一番近い国だが、それでも歩くにはかなりの距離だ。

しかし、僕たちには進む以外の選択肢がないので、このまま行けるところまで行ってみるしかない。

「どうですかリノさん、誰か人の気配は感じますでしょうか？」

歩きながら、フィーリア王女様がリノに尋ねた。

「ううん、ぜんぜん探知できない。見渡す限り無人の荒野ね」

忍者の職業に就いているリノは索敵や諜報系のスキルに長けている。彼女が持つスキル『超五感上昇』で、辺りの様子を探ってもらいながら僕たちは進んでいる。

これは五感が超人的に鋭くなるスキルで、そこそこ距離が開いていても、人間が発する微かな音

や匂いなどを感知できるのだ。

さらに遠方まで見通せる『遠見』のスキルも併用してもらっているんだけど、未だ人間を発見することができないでいる。

結局僕たちは日が暮れるまで歩き続け、状況は何も進展せずに一日が終わってしまった。

夜は僕の『魔道具作製』スキルで作った簡易テントにて寝泊まりする。もちろん、男女別々にだ。就寝中モンスターに襲われられないよう、『魔道具作製』スキルで『感知魔鈴』を作って設置してある。僕たち以外の存在が近付いてくると、このアイテムが小さな音を鳴らして報せてくれるのだ。

テントの中はそれなりに過ごしやすいが、いかにせんその場しのぎの道具なので、ふかふかのベッドのある宿屋とは比べべくもない。

よって、寝心地はイマイチであり、移動の疲れは日々溜まっていつてしまう。

一応テント内は魔法処理されているので、外気温に左右されず、快適な温度を保てるのはありがたいけどね。

◇◇◇

そんな旅を続けること数日。

自分たちが考えているよりも方向がズレているのか、街道すら見つけられずに、今日も僕たちは彷徨い歩いている。

まあ見つけたところで、追われている身の僕らとしては、安易にその道を歩くこともできないのだが。

「ふう〜……正規の街道じゃないと、ホントになかなか人って出会えないのね。もう六日も経つのに、まったく人の気配がないわ」

疲れたようにリノが呟いた。

「お腹も空きましたわ……」

気丈なフィーリア王女様も、満足に食事もできない状況が続いて弱音を吐き始めた。むしろ、ここまでよく頑張っていると思う。

不味い携帯食を大事にかじりながらさらに何日か進んでいくと、ある日空をバタバタと飛ぶモンスターと遭遇した。

全長およそ四メートルの魔鳥——コープスイーターだ！

それが数羽、こちらへぎこちなく羽ばたいてきた。

コープスイーターは、死んだ旅人などの身体を食い漁る飛行型モンスター。飛ぶのがあまり得意ではなく、今も低空を舞っている。

コープスイーターは襲ってくるでもなく、僕たちの頭上を旋回していた。あそこで僕たちが死ぬ

のを待っているんだろう。

あの程度ならジャンプで到達できる高さだ。僕は『飛翔』スキルを持ってないので、低空にいてくれるのはありがたい。

地上から遠隔攻撃する手段もないわけではない。ただ、失敗すると逃げられちゃうので、ここは接近して確実に仕留めることに。

久々の鳥肉を食べるためにも、慎重に狙いを定めて一気にジャンプ！

一瞬で上空に現れた僕に、コープスイーターたちは仰天して飛び去ろうとするが、もう遅い。

電撃のように剣を振るい、三羽まとめて斬り落とした。

残りには逃げられたけど、これだけあれば充分。

いくつかの魔物は食用にもなることがある。このモンスターもその一種だ。主食が人の屍肉というのが少し気になるところだけど、今はそんなことを言っている状況じゃない。

しっかりと体力を付けるため、獲ったうちの一片をリノの魔法で焼いて食べた。

「これ……美味しい」

「ホントですわ！ 魔物がこれほど美味だなんて……」

リノも王女様も、コープスイーターが屍肉食であることを気にせずにごんごん食べていく。

空腹こそ最高の調味料。弾力のあるジューシーな肉を、みんな夢中になって口へ運ぶ。

携帯食とは比較にならない美味な食料を、僕たちは充分堪能した。

食べきれなかった分と残りの二羽をアイテムボックスに収納し、僕たちは移動を再開する。

これでしばらくは食事に悩まされることはないな。

こんなサバイバル生活の間、いざというときのために王女様も自分で身を守るように訓練してみた。なんと彼女は『属性魔法』のスキルを習得した。

王女様は神官系の魔法——つまり『神聖魔法』が向いているんじゃないかと思っていたのに、魔道士が使う魔法のほうに適性があったとは……

しかも、リノよりも圧倒的に才能を感じる。まあそうは言っても、リノには結局、魔道士の才能が全然なかったんだだけだね。

王女様はすぐに『魔術』と『魔力』のスキルも習得した。これはなんとも頼もしい。

ただ、王女様が魔法を使うとき、ちよつと怖いんだよな……なんか狂気を感じる。

「ぐふふふ、跡形もなく消し炭にして差し上げますわ！」って感じで。

このまま魔法が上達していったら、どんな魔道士になるのか不安だ……

◇◇◇

日々僕たちは荒野を進み続ける。

道中コープスイーターと度々遭遇し、その都度ジャンプで仕留めていたら、僕のスキルボードに

『飛翔』のスキルが出てきた。

また、『暗視』と『探知』スキルも現れている。毎夜監視や警戒を怠らなかつたからかな。もちろん、経験値を消費してこれら全てを取得する。

皮肉なことに、スキルゲットを指して活動したときはなかなか成果が出なかつたのに、今では次々と有用なスキルを覚えていく。これは毎日死にも狂いで過こしているからだと思う。やはりスキルを出現させるには、必死の思いが重要なんだろう。

ただ、スキルをゲットしたのはいいものの、現在ストックしている経験値が300万しかなくなつた。レベルを上げるのはあと回しだ。

経験値が尽きてしまうと、何かあつたときに対応できなくなつちゃうからね。

しかし、経験値が300万しかない、なんて焦つてるけど、本来は300万つて結構凄い数字なんだよなあ……僕はたくさんもらいすぎて、完全に感覚が麻痺しちゃつていようだ。

確か、冒険者の総取得経験値の平均が4〜500万くらいのはず。300万経験値なんて、容易には稼げない。

僕は取得したスキルを簡単に最大のレベル10にしているけど、それにかかる経験値は最低でも1000万を超える。よほど優秀な人でもない限り、基礎スキル一つすらレベル10にできないのが普通だ。ましてやレアスキルとなると、レベル10にするのは不可能といつても過言ではない。

自分がケタ外れに恵まれていることをもつと自覚したほうがいいな。

ちなみに、『飛翔』は長距離の移動には向かない。飛行できる時間が短いからだ。

それと、浮遊力もそれほど強くないので、重い荷物を持って飛ぶことも難しい。

つまり、僕は『飛翔』を覚えたものの、リノと王女様の二人を抱えながら空を移動するというのは、ちよつと無理ということ。

川の向こう岸に渡る程度とかなら、多少重くてもなんとか可能だと思ふが……

とにかく、二人を連れての長距離飛行は絶対に不可能だ。もしそれができれば、移動がだいぶ楽になつただけだね。

アイテムボックスには生きている人間を入れられないため、リノたちを収納して運ぶという手段も取れない。結局、『飛翔』はコープスイーターを獲るときか、上空から前方を確認するときにか使つていない。

そんな調子で歩き続けているが、未だに旅人に会ふことはなく、そして当然隣国らしき景色も見当たらない。

まあ、馬車で街道を通つても通常一週間くらいはかかるしね。隣国に辿り着くのはまだまだ先になりそうだ。

そもそも正規ルートからだいぶ外れている可能性もある。このままでは、もはやいつまで歩き続けることになるのか想像も付かない。

せめて人と出会えれば、そこを足がかりに目的地までのルートを検討できるんだけどなあ……



エアストを離れ、ひたすら歩き続けて二週間。いつの間にか、神様から経験値がもらえる日になつてた。

経験値残量が少なくてもない日々を過ごしていただけに、まさに待ちわびた瞬間だ。

今回もらった経験値は5億3600万以上。ストックしてあつた300万を加えると、5億4000万ほどになる。

やはり、倍々にもらえる経験値に上限はなさそうだ。つまり、来月は10億を超える可能性も……？

とにかく、これでようやくスキルの強化ができる。

今回女神様から提示されたスキルは、『眷属守護天使』というSSランクのモノだった。

取得に必要な経験値は1000万。もちろんすぐに手に入れた。

このスキルはちよつと効果が特殊だった。どんなものかというところ、僕を直接パワーアップするのはなく、『眷女』という従者を作ることの間接的に僕の能力の底上げをするらしい。

『眷女』という単語がどういう意味なのかは分からなかったが、僕には仲間がリノとフィーリアしかない。そのため、二人にこのスキルの説明をして、協力を頼んでみた。

そうそう、何日も苦業をともしたことにより、僕はフィーリア王女を名前で呼ぶようになってしまった。まあ彼女が「フィーリアと呼んでほしい」と言つたからなのだが。

リノも、今は「王女様」ではなく「フィーリア」と呼んでいる。

ただし、フィーリアは僕を『ユーリ様』と呼ぶし、リノのことは『リノさん』と呼んでいる。彼女がそう呼びたいならそれでいいと思う。

さて、二人は僕の頼みを快諾した。というか、是非『眷女』になりたいと言ってくれた。

『眷女』にすることにより、どんな影響が出るか不安だったが、二人とも僕を強く信頼してくれた。それで僕に迷いはなくなった。

『眷属守護天使』を二人にかけてみると、劇的なことが僕たちの身体に起こつた。

まずは僕だ。なんと、リノとフィーリアの持つ戦闘スキルや基礎スキルが、全て僕にも継承されたのだ。経験値を使うこともなく、そのまま習得できた。

たとえば、リノの持つ『忍術』、『刃術』、『隠密』、『精密』、『遠見』、『解錠』などのスキル。そしてフィーリアの持つ『属性魔法』、『魔術』、『魔力』といったスキルだ。

僕は魔法をずっと習得できなかったが、これによって僕も『属性魔法』が使えるようになった。いずれもレベル1だったが、嬉しいことに経験値を消費してレベルを上げることが可能だった。

さつそく経験値を約1000万使って、『属性魔法』のレベルを10まで上げる。

さらに、同じく継承した『魔術』と『魔力』スキルもレベル10にしたら、この二つが融合して、

『魔導鬼』という上位スキルに進化した。

『眷属守護天使』のおかげで、僕はあつという間に世界最強クラスの魔道士になれたわけだ。これで魔法に関して、そう簡単に後れを取ることはなくなつたと思う。

ちなみに、『魔術』の派生スキルとして『連続魔法』と『高速詠唱』というスキルも覚えた。『高速詠唱』は魔法の詠唱時間を短くできるという大変便利なスキルであるため、すぐにレベル10にした。これでレベル10までの魔法を高速詠唱できる。

『連続魔法』のほうはとりあえず保留だ。これは一度の詠唱で魔法を連続で放つことができるというスキルだが、現段階ではあまり必要性を感じなかった。

また、リノから継承された様々なスキルも、それぞれ経験値1000万使って全部レベル10にしてみた。すると、こちらもいくつかのスキルが融合された。

まず、『刃術』と『敏捷』スキルだ。これらは『滅鬼』という上位スキルに進化した。それと、『忍術』と『隠密』は『冥鬼』という上位スキルになった。

『滅鬼』は近接戦闘にめつぼう強いスキルで、『冥鬼』は暗殺系のスキルらしい。

こうしてリノたちから様々なスキルを継承したことで、僕の能力は飛躍的に強化されたのだ。一方、『眷女』となつたリノとフィーリアには、なんと称号らしき名が付いた。

リノが『妖王妃』という名で、フィーリアが『聖魔女』という名だ。どうやらこの名前を与えられることが、『眷女』である証のようだ。

さらに、僕の各ステータス値の5%が、彼女たちのステータスに加算されるようになった。

5%とはいえ僕のレベルは100なので、リノたちに加算される数値はなかなか馬鹿にならない。しかも『眷属守護天使』のスキルレベルを上げると、加算される数値の割合も増えるらしい。つまり、今後は僕を強化することで、同時にリノたちの強化もできるということ。

なお、リノたちが『神授の儀』で授かつたスキル——リノの『超五感上昇』やフィーリアの『聖なる眼』は、僕には継承されなかった。

『眷属守護天使』で継承できるのは、通常スキルだけみたいだ。それでも、このスキルがもたらしてくれる恩恵は非常に大きい。

今後は僕のベースレベルを上げると、それに比例してリノたちのステータスも上がることになる。単純に僕のレベルを上げるだけでも、パーティ強化という観点では大きな意味を持つ。

そして恐らく、彼女たちが戦闘スキルや基礎スキルを覚える度、僕にもそれが継承される。僕たち全員がリンクしながら強くなれると思うと、かなり心強いスキルだ。

僕は残つた経験値の使い道に悩んだが、経験値を3億以上使ってベースレベルを300まで上げた。

その僕のステータスのうち5%が、『眷属守護天使』によってリノたちに加算される。

このスキルがあれば、リノたちはステータス上げのためにベースレベルに経験値を使う必要はなくなるだろう。今後は経験値をスキルに全振りできるので、彼女たちの成長はグッと速くなるはず。

いいスキルを取得できて大満足だ。

ほか、レベル1のままだった『飛翔』、『暗視』、『探知』をレベル10まで上げた。すると、『探知』が『気配感知』と融合して、『領域支配』という上位スキルに進化した。

これは周囲の索敵もさることながら、相手の殺意や敵意を鋭敏に感知できるようになるスキルらしい。このスキルがあれば、奇襲や暗殺に対し、より迅速に反応できそうだ。不意打ちを喰らうこともそうはないだろう。

ほかの能力強化に関しては、どこか安全な地に着くまで保留としておく。もしくは、必要に応じてその都度スキルレベルを上げる。

ということで、残り経験値約1億をストックして今回の強化を終えた。



その日の夜。

テント内で就寝中、ふと異様な気配を感じて目を開けると、すぐそばにリノとフィーリアがいた。

「……ん？ な、なんだ!? ちょ、リノ、フィーリア、こんな夜中にいったい何して……?」

「ちっ、起きちゃったわ! もう少しで私の『金縛りの術』が完成したのに!」

「わたくしの『睡眠魔法』の効果が弱かったようですね。やはり、もう少しレベルを上げてからや

るべきだったのかしら?」

どうやら僕が眠っている間に入ってきたらしい。正直、少々パニック気味だ。

いったん心を落ち着けて、この状況を整理する。

テントは『魔道具作製』スキルで作ったので、簡単には入ってこられない作りになっているんだけど、リノは『解錠』スキルを持っているため、それで強引に開けて入ってきたと思われる。

先日の『眷属守護天使』で『眷女』となったことでリノたちのステータスがアップしたので、

『解錠』技術も上がったのだろう。

それにしても、『領域支配』を持つ僕のテントに忍び込むなんて、ホントただ者じゃないよ。

まあ『領域支配』は殺意や敵意に強く反応するので、相手に攻撃する意志がない場合は、そこまで感知能力を発揮しないみたいだね。スキルレベルもまだ1だし。

「ユーリ、もうほかの国に行くのは諦めて、私たちだけで暮らそう!」

「そうですね、ここで子供をいっぱい作りましょう!」

「二人ともナニ言ってる……!」

「フィーリア、私がユーリを押さえつけてるから、もう一度『睡眠魔法』をかけて!」

「了解ですわ! 汝、宵闇を迎え……!」

リノが僕に飛びかかり、その間にフィーリアが魔法の詠唱を始めた。

フィーリアはまだまだレベルが低いし、こんな状態で『睡眠魔法』なんてかかるわけがないで

しよ！

「リノ、フィーリア、いいかげんにしなさい！」

僕は力づくで起き上がり、二人をピシャリと叱りつける。

やりすぎたことに気付き、シュンと大人しくなつて正座する二人。

それにしても、フィーリアが『闇魔法』の『睡眠魔法』まで覚えていたとは。

恐らく、僕を状態異常にするため、こっそり練習していたんだろう。うっかり気付かなかつたが、

『サイヴァントヴァルキユリア眷属守護天使』の効果で、フィーリアの『闇魔法』は僕にも継承されていた。

僕を襲うためとはいえ、難しい『闇魔法』をこども簡単に習得するなんて、その熱意と才能には

心底感服する。というか、どんだけ本気なんだよ！

『睡眠魔法』で僕を深く眠らせたあと、リノの持つ忍術『金縛り』で、僕のことを動けなくしよう

としてたらしい。なんと危険な少女たちだ。

本来なら絶体絶命だったけど、先日僕はベースレベルを300にしていたので、レジスト能力も

上がっていた。

おかげですぐ目が覚めて、危機一髪でピンチを回避できたのだった。

食糧問題が解消し、先日経験値をもらつて精神的にも余裕ができたので、僕としたことがつい油

断してしまった。

まったく、『金縛り』なんて喰らったら、いったい何をされることか……ホントにロクでもない

ことばかり考える二人だ。早く『異常耐性』スキルがほしい……

「次こんなことしたら許さないよ！」

「やだユーリ、ごめんなさい、嫌にならなくて……！」

「わたくしも反省しますから、どうかお許しを……」

僕に釘を刺され、涙目になるリノとフィーリア。僕たちは逃亡者だというのに、緊張感つてモノがないよなあ。

まあでも、こういう彼女たちだからこそ、こんな状況でも元氣付けられている。

忘れないうちに、フィーリアから継承した『闇魔法』をレベル10にした。『闇魔法』はレベル

アップに通常の倍の経験値が必要なので、ストックから2000万ほど消費し、残りは8000万。

フィーリアの行動は大変不純だが、おかげで『闇魔法』を習得できた。一応感謝しておこう。

2. アマゾネスの戦士

「ユーリ、何か感じる……多分人よ！ それも大勢いるわ！」

「ホントか、リノ!？」

ひたすら歩き続けてすでに三週間。リノの『ハイパーセンシティブ超五感上昇』が、ついに人の気配を捉えたようだ。

辺りに都市や街は見えないので、小さな村とかだろう。

それでも、人がいる場所に辿り着いたのは大きな前進だ。

僕は『飛翔』で飛び上がり、リノが感知したという方向を『遠見』スキルで確認する。

すると、前方の森の中に村らしき集落を見つけたのだった。リノの感知がなければ、そのまま通り過ぎてしまったかもしれない。

「村があった！ お手柄だぞ、リノ！」

「ホント!? じゃあユーリ、ご褒美にキスして！」

「リノさん、それはズルいですわ！」

フィーリアが即座に抗議した。うーん、さすがにキスはちよつと……

「いや、ご褒美は別のモノで……」

「じゃあナデナデして！」

とりあえず、ムフーと得意満面な顔をしているリノの頭を撫でる。

それを見たフィーリアが黒いオーラを出し始めたので、この旅をよく頑張ったということで、彼女も撫でてあげた。

長く過酷な日々能耐えられたのは、三人で力を合わせたからだ。改めて、本当に頼りになる少女たちである。囚われになっていた僕が助かったのもリノとフィーリアのおかげだし、二人には頭が上がないな。

僕たちは森の集落に向かって、もう一踏ん張り歩いた。

草木がビッシリと生い茂り、人の通るような道などまるでない森の中を、リノの『超五感上昇』を頼りに僕らは進んでいく。

幸い危険なモンスターとは遭遇せずに、目的の村へと到着した。

村の中には、自然を利用した原始的な作りの家屋があちこちに建ち並んでいる。

村人は少し前に僕たちの接近に気付いたらしく、武器を構えた十数人の衛兵らしき人が、わらわらとこちらへ歩み寄ってきた。

それが……なんと全員女性だ。しかも、ただ適当に武器を持っているという素人ではない。

鍛え上げられたその逞しい肉体から、れっきとした戦士ということが分かる。ただ、全員『ピキニアーマー』という防具を着ていた。

『真理の天眼』で解析してみると、女性たちのほとんどがレベル60を超えていた。戦闘スキルや基礎スキルなどのレベルもなかなか高く、冒険者でいうとAランク相当の実力はあるだろう。

その中に一人、戦士とは違う少々年老いた女性がいた。恐らく村の代表なのだろう。

その老婆を真ん中に据えて、女戦士たちは僕らの前に立ち塞がった。

当たり前だが、だいぶ警戒されているようだ。

どうしたものかなと思案していると、はっと気付いたようにリノとフィーリアが話しかけてきた。

「ユーリ、彼女たちって、多分『アマゾネス』だわ！ ホントにいたのね」
「わたくしも聞いたことがあります。女性だけの村が存在すると……」
アマゾネスだって？ そういや学校の授業で習ったっけ。

確かアマゾネスは『神授の儀』を行わないので、神様から授かるレアスキルは持っていない。その代わり、幼少の頃から戦ってどンドン経験値を獲得しているのだから、高レベルを誇る一族なのだから。

なるほど、確かに目の前の女性たちは、まだ若いのにかなりの高レベルだ。

「お前たち、どうやってこの場所を見つけた？」

老いた女性が、僕たちに質問をしてきた。代表して僕が答える。

「上空から、森の中にこの集落があるのを見つけたんです」

「なんと、空を飛べるといふことか……しかし、それでもよく村に気付いたな？」

確かにこの村は、たとえ空から見られても、そう簡単には発見できないように隠されている感じだった。リノの感知のおかげで、注意深く探すことができたのである。

「驚かせてしまって申し訳ありません。僕たちは道に迷っているだけなんです。ここで少し休ませてもらったら、すぐにまた出発しますので……」

とにかく、僕たちに敵意がないことをアピールした。

この村の位置が分かれば、その情報を頼りに他国へと向かうことができる。それにやっと人と出

会えたんだ、ここで長旅の疲れを癒やしたいところ。

しかし、こちらのそんな思いとは裏腹に、老婆は僕らを敵と判断したのだった。

「このめでたい『戦皇妃』誕生の祝祭に、薄汚い男がやってくるとはな。己を不運と呪うがよい……殺せ！」

そうだ、アマゾネスって、非常に好戦的という話だった。

それにしても、いきなり殺せとは……交渉の余地なしですか？

老婆の命令を聞いて、女戦士たちがまとめて僕に襲いかかってくる。

「ユーリっ、危ないっ！」

「ユーリ様っ!？」

「大丈夫、リノとフィーリアは後ろに下がって」

心配する二人に、そう言って安心させる。

アマゾネスたちが強いといってもAランク程度。何人いても僕の敵じゃない。

とはいえ、長旅の中せつかく出会えた人たちだし、このまま返り討ちにして対立を深めたくない。そう考えた僕は、攻撃を上手く躰しながら、アマゾネスたちの武器を一つずつ取り上げていった。

彼女たちは剣だけではなく弓矢でも攻撃してきたが、それらも全て手で掴んで止める。相手の武器が全てなくなったところで、いったん戦闘が終わった。

「こっ、こやつ、ただの小僧ではないな!？」



老婆が驚きの声を上げた。

これでもう一度交渉できるかと思っていると、アマゾネスたちの後ろからもう一人、長い黒髪をポニーテールにした女戦士が現れる。

「婆よ、苦戦しているようだな」

見たところ、その女戦士はまだかなり若い。恐らく僕らと同じ歳かちょっと上くらいだろうに、能力を解析してみたら、なんとレベル83もあった。戦闘スキルのレベルも高く、ほかのアマゾネスたちよりも強さが頭二つ抜けている。

間違いなくSSランク級の力がある。その若さでこの能力の高さは凄い。

老婆はその女性に鋭い口調で言う。

「ソロル、何故ここへ来た!? 今日はお前を祝う日じゃ、大人しく英霊様の加護を受ける儀式を続けておれ!」

「いや、これは新しく『戦皇妃』となったオレの初仕事だ。この男を殺して、先達の英霊たちに捧げよう」

ソロルと呼ばれた女戦士が、僕の前に立って剣を抜く。

身長は僕より気持ち低い程度——百六十五、六センチくらいか?

アマゾネスたちは全員日に焼けた肌をしているが、このソロルという女性はさらに一段と色の濃い小麦色で、そしてもの凄いグラマラスな身体付きをしている。要するに巨乳だ。

「今日はことさら神聖な祭り、お前のような薄汚い男など村には入れぬ。そして弱き男には死あるのみっ！」

ソロルは一瞬で僕との間合いを詰めて、僕の首を剣で斬り落としにきた。

並みの冒険者では、何が起きたかも分からないまま首がなくなっていただろう。けど、今の僕は、少し先の行動が見える『超越者の目』がある。

よって、その鋭い一撃を難なく躲せた。

「な……なんだと!？」

初撃によほど自信があったのか、自らの剣が空を斬ったことにソロルは驚き、慌てて二の太刀、三の太刀を浴びせてきた。

もちろん、それが僕に当たることはない。回避に特化した『幽鬼』スキルも持っているしね。

攻撃の乱舞を、僕は最小の動きで躲し続ける。

「こ、こいつ……大して動いてないのに、何故オレの剣が当たらないんだ!？」

ソロルはムキになつて剣を振り続けるが、なんていうかその……いや、見るつもりはないんだけど、動きに合わせて大きな両胸があちこち弾んでいるので、つい目で追ってしまう。

なんか僕のほうが恥ずかしいんですが？

「ユーリ、おっぱい見ちゃダメ！ 目を瞑って戦うのよ!！」

「そうですね、あんなモノに惑わされてはなりません！ しょせん脂肪の塊、大ききなんて無意味ですわ、

味ですわ!！」

リノとフィーリアの荒い声が聞こえてくる。目を瞑れだなんて、無茶な……

どうもソロルの巨乳に嫉妬している感じだけど、リノたちも別に小さいわけじゃないからね。気にすることないよ……とか僕までバカなことを考え始めてしまった。

さてこの戦い、どうやって終わらせよう？

「退くがよいソロル、『村守』様をお連れしてきた!！」

僕が対応に悩んでいると、老婆が大型の獣を連れてきた。

白とセピア色の長い毛に覆われたそれは……『猫獣』だ。こんなに大きな『猫獣』は見たことないけど、その特徴的な顔から間違いないだろう。

『猫獣』は、よくペットとして飼われている『猫』の大型種で、通常は一メートル五十センチほどの体長だけど、『村守』と呼ばれた個体は三メートル以上の大きさがあった。

これは現在ではまず見かけないサイズ。こんな大型の『猫獣』はとくに絶滅したはずだ。

この手の大型動物は何種かいて、モンスターとの違いは体内に魔石が存在しないこと。魔石がなければそれほど凶暴にもならないので、ペットとして人間と共存したり、または家畜として飼われたりしている。

ちなみに、獣人種である『猫人』は、祖先が『猫獣』の血を引いていると言われている。

「『村守』様か……分かった、この男の始末は『村守』様にお任せしよう!！」

老婆の言葉を聞いて、ソロルが後ろに下がる。

それと入れ替わりに、『猫獣』がゆっくり僕の前に歩いてきた。

確かに『猫獣』はそれなりに強いけど、モンスターではないので戦闘に長けた冒険者には到底敵わない。コイツがいくら大型であろうとも、たとえばCランクモンスターであるサーベルタイガーのほうが遙かに強いだろう。

それはアマゾネスたちにも分かっているはずなのに、なんで連れてきたんだ？

『村守』様、我が村に仇なす者を食い殺してくださいませ！

老婆がけしかけると、なんとただでさえ見たことないほど大型な『猫獣』が、さらに巨大化した！

もりもりと筋肉が盛り上がり、骨格もガッシリと厚みを増して、手足も伸びていく。

長い毛までモッフモッフとボリユームを増し、見た目は体長六メートルにもなった。

こんな獣なんて見たことも聞いたこともないぞ!? 『真理の天眼』で解析したところ、SSSランク冒険者と同等以上の強さはありそうだった。

といっても獣やモンスターにはレベルや戦闘スキルという概念がないので、強さを正確に測るのは難しいのだが。

それにしても、モンスターでもないただの獣がこれほど強くなるなんて!?

なるほど、『村守』と呼ばれるわけだ。とはいえ、僕よりはやはり弱い。

戦いたくはないが、この『猫獣』を叩きのめさなくちゃダメか……？

ブルーの大きな瞳が、じつと僕を見つめ続ける。

僕と『村守』の睨み合いは続き……いつ飛びかかってくるのかと思っていたところ、巨大化していた『村守』がスルスルと縮んで元の大きさになった。

え？ ひよつとしてパワー切れ……とか？

よく分からないけど、『村守』は戦意が完全に消えている。そして、僕に近付いて甘えるような仕草をした。

どうなってるんだ？

「ど、どういうことじゃ!? 『村守』様が外の者に懐くなど……はっ、まさかお前は、英霊様が迎えし戦神!？」

なんだ？ 戦神……って僕のこと？

老婆の言葉を聞いて、アマゾネスたちもざわめいている。

「そうか、そういうことじゃったか！ 戦皇妃の祝祭に、戦神様がいらっしやるとは……! これはいきなり襲って大変申し訳ないことをした。村をあげてもてなしますゆえ、数々の無礼、平にご容赦願いたい」

アマゾネスたちから殺気が消え、態度も軟化した。

「急に友好的になったわね。どうするユーリ?」

リノが耳打ちしてきた。

うーん、僕たちが敵じゃないと分かってくれたのかな？

「村に入れていただけたら大変助かります。どうかしばらくの間、ここで休ませてください」

「もちろんじゃ、その娘っ子たちも遠慮なく来るがよい」

「やった！ どうなることかと思っただけど、さすがユーリ！」

「これでゆっくり休めますわ……」

リノとフィーリアも安堵している。

僕たちはアマゾネスたちに促されるまま、村の中に招待された。

3. 絶体絶命大ピンチ？

「戦神様には本当にすまないことをした。さあさ、よりをかけて馳走ちそうを用意しましたゆえ、たくさん召し上がってください」

大きな家に案内され、そこでしばらくくつろいでいると、アマゾネス族の代表である老婆——イナニガという女性の指示で、豪華な料理が運ばれ始めた。

実は今日は、村をあげての大きな行事——最強の戦士が誕生した祭りをしていたらしい。

先ほど戦ったソロールという女戦士がその人で、数々の厳しい試練を終えて、部族最強の証である『戦皇妃』の名を継いだのだとか。そのお祝いのため、色々と料理が用意されていたのだ。

それはともかく、僕のことを戦神様と呼んでたけど、アレはなんなのかな？

「美味しいですわ、これほどのご馳走は食べたことありませんわ〜」

「凄いい、いくらでも食べれちゃう！ もう一生こんな食事なんてできないかと思ってたよー！」

フィーリアとリノは、手を休めることなく次々と料理を口に入れ、片っ端から平らげていく。かくいう僕も、料理を口に運ぶ手が止まらない。

ずっと苦しい旅だったから、こうして安全な場所で食事をすると、本当に生き返った気がする。

「まだまだたくさんあるで、遠慮せず食いなされ」

空になったお皿が下げられ、また目の前に料理が並べられる。

だいぶお腹も満たされたので、代表であるイナニガさんに、この村のことを少し聞いてみた。

思った通りここは隠れ里で、滅多なことではよその人間が辿り着くことはないらしい。アマゾネスたちも、ここを出てほかの国に行くようなことはないとのこと。

つまり、外部とはほぼ完全に断絶されているということだ。ひよっとしたら、思いもよらない風習とかがあるかもしれないな。

それと、もう一つ気になったことが。

「あの大きな『猫獣』……『村守』様のような獣は初めて見たのですが、ほかにもこの辺りには

いるのですか?」

「いや、『村守』様以外には棲すんでおらぬよ」

「では、あの一頭だけ? どこで捕まえたんですか?」

「ワシも知らぬ。村に伝わる話では、二百年ほど前に村人が狩り場で仔こじょう獣が倒れているのを見つけ、それを拾って育てたらあの『村守』様になったということじゃ」

「二百年前!」

モンスターならいざ知らず、通常の獣がそんなに長生きするわけがない。何かの間違いじゃないかな?

あるいは、この近くには『猫キツネ獣』が複数棲息していて、寿命が来る度に別のを捕まえて飼い続けていく……とか?

まあ、この辺りは未開の地だから、どんな生態系になってもおかしくない。『村守』のような獣は、今もそこそこ生き残っているのだろう。一頭だけじゃ繁殖していけないしね。

アマゾネスたちにはまだまだ聞きたいことはあるんだけど、満腹になった幸福感と、人のいる場所に辿り着いた安堵から、眠くなっちゃった。

今日はこのくらいにして、また明日にでも続きを聞くことにするか。

横を見ると、リノとフィーリアも、テーブルに突っ伏して眠っていた。

……? あれ? なにかおかしい気が……

異常に眠い……眠すぎる。身体もだるくて何も動かせない……

だめだ、とても目を開けていられない……

そこで僕の意識は飛んでしまった。

◇◇◇

目を覚ますと、僕は薄暗い部屋の中に寝かされているようだった。一瞬、なぜこんなところにいるのかが分からず、何があったのか思い出そうとする。

……そうだ、アマゾネスの村に入って、料理をご馳走されたんだった。

その後の記憶が……えーと、どうしたんだっけ?

とりあえず、『暗視』スキルで周りを探ってみようとする——すぐそばに誰かがいる!?

「くっく、気が付いたようだな」

寝ている僕の顔を覗き込むように、真横でしゃがみ込んでいたのは、あの女戦士ソロールだった。

ほぼ同時に、手足が上手く動かせないことに気付く。ここでようやく、現在の自分の状況が分かった。

なんと、両手両足に縄を結びつけられ、パンツ一丁で大の字に緊縛きんばくされている。何コレ、どういうこと!?

拘束を外そうとジタバタしていると、ソロルが服を脱ぎ始めた。

待つて待つて、いったい何が起こってるんだ!?

「オレの戦王妃就任の日に戦神が来るなんて、こんな嬉しいことはない」

「あ、あの……戦神ってなんですか?」

「とぼけなくてもいい。お前ほどの男がこのタイミングで村を訪れるなんて、神の導き以外に考えられぬ。我が村に戦神が来てくれたのは数百年ぶりだ」

「いや、僕は戦神というヤツじゃないですよ?」

どうにも話が見えてこない。

それに、『戦神』と崇あがめられているなら、なんで僕は裸で拘束されているの?

「我が村には男がいない。一族の繁栄のため、たまに村の近くまで迷い込んでくる男を捕らえてそこから子種を頂戴するが、近頃では弱い男ばかりで衰退のいっど一途を辿っていた」

「そういう思い出したぞ!」

アマゾネス族は、外部から男を引き込んで子作りをする。

そして、アマゾネスからは女の子しか生まれぬ。授業でそう習った気がする。

「戦神の種は、我らに大いなる力を授けてくれるという。お前ほどの男となら、素晴らしい子が作

れるだろう」

うおおおおようやく分かった、理解しました!

強さを充分すぎるほど見せつけた僕は、アマゾネス族の交配の相手に選ばれちゃったのね。それも、戦神なんていう大げさな存在だと思われているわけだ。

まずいですよコレ!

それと、一つだけ気になってることがあるんですが……

今この村に男はいないって言ったよね? 仮に僕が子作りに協力したあと、どうなるんですか? ソロルにそれを訊いてみる。

「ふん、子種をもらったあとの男は用済みだ。戦神といえども例外ではない。安心しろ、我らの子作りが終わる頃には、男はただの抜け殻になる。死ぬ恐怖もなくなっていることだろう」

それって廃人になるってこと? つまり、僕は完全に壊されたのちに、処分されちゃうってわけですか!?

何故なんだ!? フィーリアに襲われたときといい、僕の運命ってこんなものばかりだ!

そんな目に遭あってたまるか! と力を入れてみたけど、まったく拘束が解けない。というか、まるで力が入らない。

『真理の天眼』で自分を解析してみたら、重度の麻痺状態だった。

「アマゾネスの秘薬を料理に入れたから、当分お前は動けないぜ。今夜は一晚中オレたちの相手を

してもらおう。まずはオレからだ！」

絶体絶命！ 今頃リノもフィーリアも拘束されているだろうから、僕を助けに来られるとも思えない。

もはやこれまでか……

ゴオオオオオオッ！ ドドーン！

観念しそうになったその瞬間、村を揺り動かすような大地の震動と、空気を震わす轟音ごうおんがこの場を襲った。

さらに、何やら悲鳴のような声と、バキバキといった破壊音まで聞こえてきた。

「な、なんだこの騒ぎは!？」

この突然の異常事態に、ソロルも僕を襲うことを忘れて動揺している。

何かが……村に起こっている！

動けない僕を置いて、ソロルは慌てて部屋から飛び出した。

ここからでは外の様子は分からないが、これはただ事じゃない。

『気配感知』と『探知』の融合スキル『領域支配』で様子を探ると、何かとてつもない存在が近くにいることが分かった。

状況的に間違いなく敵だ。今この村はそいつに襲われている！

くっ、非常時だというのに、僕は麻痺状態でどうすることもできない……と思っていたら、いつの間にか新しいスキルが取得画面に出ていた。

ずっと欲しかった、念願の『異常耐性』スキルだ！ これが取得可能になっている！

そうか、アマゾネスの秘薬で重度の麻痺状態にされた上、生命の危機も感じたことにより、ようやくスキルが開花したんだ。まさに奇跡のタイミングだ！

当然取得し、経験値1000万ほど使ってレベルを10にする。

すると、麻痺していた身体がたちまち正常に戻った。あとは力づくで拘束を外すだけ。

僕はベースレベル300だし、『腕力』スキルもレベル10だ。この程度のことは造作もない。

さらに、『異常耐性』スキルをレベル10にしたことにより、持っていた『耐久』、『頑丈』スキルと融合される。

この三つが融合した結果、『竜体進化』という超強力なスキルに進化した。これは、圧倒的な耐久力が付くスキルらしい。あらゆるダメージを軽減し、そして状態異常攻撃もほぼ無効にする。

これで僕の肉体は大幅に強化された。もう状態異常は怖くないし、並大抵の攻撃では致命的なダメージは受けない。

何がこの村を襲っているのかは分からないが、今の僕なら、そう簡単にはやられないぞ！ ソロルを追って、僕も外へと飛び出した。



コイツが……村を襲っていたのか！ こんな近距離で見たのは初めてだ。

そこにいたのは世界最強の生物種——体長二十メートルを超えるドラゴンだった。

『真理の天眼』で解析してみると、そいつはノーマルドラゴンだった。ドラゴンにもランクがあって、たとえば女神様を襲った邪黒竜は最上位種に近く、今の僕でも恐らく敵わない。

しかし、通常種なら倒すのは充分可能だ。通常種は、やっかいな『竜語魔法』も使ってこないし。ただ、倒すにはそれ相応の武器が必要だ。

強靱な身体を持つドラゴンには、生半可な武器は通用しない。僕が以前作った『炎の剣』があれば、なんとかなったかもしれないが……果たして予備の剣でどこまで通じるか？

剣を強化したところだが、大量のMPを消費するため、迂闊に強化することもできない。

とにかく、追い払うだけでもしないと、村が滅びてしまう！

ドラゴンは低空を飛びながら、村に向かってブレスを吐いていた。アマゾネスたちは何もできず、ひたすら逃げるだけだ。

そうだ、飛び出していったソロルはどこにいるんだ？

注意深く見回していると、逃げ惑うアマゾネスたちの中に、ソロルの姿を見つけた。

ソロルは戦皇妃として、自分の身を犠牲にして仲間を守ろうとしているらしい。派手に動いて、ドラゴンを引き付けようとしている。

無茶だ、無駄死にするだけだぞ！

そこに、大型化した『猫獣』——『村守』も駆けつけ、ソロルに加勢した。

たとえ本気状態となった『村守』でも、ドラゴンには到底太刀打ちできない。本能的に『村守』にも分かっていると思うが、それでも必死にアマゾネスたちを守ろうとしている。

僕も戦闘に加わるため、全力でそこへ向かっていく。

そのとき、無理な体勢でドラゴンの攻撃を回避しようとして、ソロルの体勢が崩れた。そこにブレスが直撃コースで吐かれる。

間に合えっ！

僕は全身の筋力を極限まで収縮し、一気に爆発させて矢のようにソロルのもとへ飛び込む。間一髪、ブレスが到達する前にソロルを救い出せた！

「お、お前は……!? いったいどうやって抜け出した？」

「説明はあとだ、ここからすぐ離れ……」

ソロルを逃がそうとした瞬間、僕たちを追ってきたドラゴンが顎を開ける。

その喉奥にブレスの光が見えたとき、『村守』が僕らを守るために立ち塞がった。

まずい、これではソロルと『村守』を同時に救えない！

僕は瞬時に判断し、イチかバチかの剣技を放つ！

「『超超特大衝撃波』っ！」

音速の衝撃波が僕たち目がけて放たれたプレスを斬り裂き、ドラゴンの顔に直撃する。

思わぬ反撃にドラゴンは一瞬間食らったようだが、ガルルと唸って首を一振りしただけだった。やはり衝撃波などではダメだ、直接剣を打ち込まないと！

その時、予想外のこと起きた。

『村守』——『猫獣』キャットビーストに対して、僕のスキル『眷属守護天使』サーヴァントウアルキユリアが反応したのだ。

どういふことだ？ まさか『猫獣』キャットビーストがスキルの対象になっているのか？

これは『眷女』という従者を作るスキルで、獣は対象外のはずだ。

戸惑いを覚えるが、迷っている暇はない。僕の眷属となれば恐らく『村守』も強化されるはず！

僕は『村守』を『眷属守護天使』で『眷女』——いや『眷獣』にした。

すると……

「む……『村守』様っ、なんだ、これはいったい……!？」

ソロルが驚くのも無理はない。

なんと、六メートルほどだった『猫獣』キャットビーストの身体が、ムクムクとさらに巨大化して十メートル近くにもなったのだ。

そして体毛がキラキラと黄金色に輝きだし、青だった瞳も金色に変化した。

さて、この姿の獣って、心当たりがあるぞ！ そう、伝説の幻獣『キヤスパルク』だ！

まさか『村守』って、成長途中の『キヤスパルク』だったのか!? それが僕の眷属となったことにより、本来の姿に覚醒した？

「ンガオー！」

少し喉にかかるような鳴き声を発し、『村守』は空中にいるドラゴンへと飛びかかった。

凄い！ あの巨体にして、なんと軽やかな身のこなしなんだ！

驚いたドラゴンが爪や尻尾、プレスで応戦するが、『村守』は素早くそれを躲していく。そして強烈な雷撃をドラゴンに撃ち放つ。

よし、いける！ ドラゴンに負けてないぞ！

ただ、空を飛ばない『キヤスパルク』には、ドラゴンを倒すだけの決め手がないようだが。とにかく、ドラゴンを引き付けてくれているうちに、こっちも反撃の準備だ！

「ソロル、この村に何か強い武器はないか？」

「武器？ 剣ならば、戦皇妃として受け継いだこの『戦士の剣』が一番強いが……？」

僕はソロルが持っていた『戦士の剣』を鑑定してみる。

なるほど、さすが村一番の武器だ。最上級クラスの出来はある。

この剣を強化すれば、ドラゴンにも対抗できるはず！

「ソロル、その剣を貸してくれ！ あのドラゴンは僕が倒す！」

「戦神……様、村を守ってくれるのか？ あのような仕打ちをしたというのに」
「もちろんだ、僕を信じてくれ」

小さく頷いたソロルが、僕に『戦士の剣』を渡してくれる。その剣に『魔道具作製』スキルと『装備強化』スキルを施し、即席ながら対竜族専用武器——『ドラゴンキラー』を作り上げた。ドラゴンの硬さに対抗するため、破壊力重視の剣だ。

きつとコレなら、あの強靱な鱗うろこごと叩き斬れる！

僕は『飛翔』で上空へ上がり、『剣身一体』を発動した。そして、ドラゴンの前に立ち塞がる。

僕の『飛翔』はレベル10。ドラゴン相手でも空中戦で後れを取ることはない。

「村守」様、ドラゴンを引き付けてくれてありがとう。あとは僕がやるよ」

僕の言葉を理解したのか、『村守』——『キャスパルク』はドラゴンに飛びかかるのをやめて後ろに下がる。

ドラゴンは目の前に現れた僕を焼き尽くそうとブレスを吐くが、回避特化の『幽鬼』と、先の行動が見える『超越者の目』があるので、そう簡単には喰らわない。

習得したばかりの『竜体進化』もあるし、今の僕にはドラゴンの攻撃はそれほど脅威じゃない。落ち着いてブレスを躲し、あとは反撃のチャンスを待つだけだ。

攻撃を避けまくる僕に、一瞬ドラゴンが迷いを見せた。その隙を見逃さず、一気に接近して対ドラゴン必殺技を叩き込む。

「竜滅閃斬りゆうめつせんざんっ！」

上位剣術スキル『斬鬼』の技で、硬き竜を真つ二つに断ち斬るほどの、ひたすら攻撃力に特化した必殺技だ。

これが無事決まり、ドラゴンの首は胴体から離れ、地上へと落ちていった……

4. ひとときの平和

「あなたは真の戦神様だった。どうか我らの罪を許してほしい」

長老を含め、アマゾネス全員が頭を地に付けてお詫びしてきた。さながら、神の怒りを恐れる子羊だ。

村がドラゴンに襲われるなんていうのは初めてのことで、どうやら僕に無礼を働いた天罰だと思っっているらしい。

すっかり神様だと思われる。この誤解、解けるかな。

ドラゴンの襲撃中、リノとフィーリアは眠らされたまま離れに放置されていたが、今はもう目を覚まして無事合流している。もし離れを襲われていたらヤバかったな。

ドラゴンに急襲されながらも、大怪我した人はいなかった。

負傷したアマゾネスたちは、すでに僕が作った薬で全員治療を終えている。村の損害は決して小さくないが、この程度なら復興可能だろう。

そして僕を襲ったソロルはというと、別人のようにしおらしくなって、かいがいしく僕の世話をしてくれている。子種だけが欲しいとかじゃなくて、正式に僕に嫁ぎたいそうだ。

アマゾネスは基本的には村から出ずに一生を村内で過ごすらしいが、ソロルは特例で村から出る許可をもらっているとのこと。

真の『戦神』の子を授かるのは部族の悲願。生まれた子は女王となって、アマゾネスを進化させる役目を担うというのだ。

そんなわけで、僕は部族全員からソロルとの婚姻を懇願されている。おかげでリノとフィーリアがカンカンだ。

ちなみにソロルは現在十八歳で、僕より一歳年上だった。もし結婚したら姉さん女房になるな。まあ、リノたちが断固として阻止するだろうけど。

それと、どういうわけかソロルにも『眷属守護天使』が反応するようになった。

ほかのアマゾネスたちにはスキルが無反応なので、『眷女』にするには何か条件があるらしい。今後詳細を検証していきたいと思う。

とりあえずソロルにスキルのことを説明したら、是非『眷女』になりたいと言ってくれたので、『眷属守護天使』をかけてみた。

すると、彼女には『闘神姫』という称号が付き、リノたちと同じように基礎ステータスがパワーアップした。

僕もソロルから、一部のスキルを継承する。彼女が持っていたスキルのうち、僕は『武術』を持つていなかっただので、それを習得することができた。

そして『武術』をレベル10にしてみると、『腕力』スキルと融合して、『闘鬼』という上位スキルに進化した。

これは素手での近距離打撃戦で猛威を振るうスキルらしい。これで方が一武器がない状況となっても、慌てることなく対処できる。

『闘鬼』をレベル2に上げるのには経験値が2000万必要となるので、現状では保留とした。ソロル同様、僕の眷属となった『村守』様——伝説の幻獣『キャスパルク』だけど、これについては特にスキルを継承することはなかった。

獣には人間が使うようなスキルはないので、当然といえば当然だが。

『村守』様のほうは、『眷獣』となって能力がアップしたみたいだ。

ちなみに、あのおとき十メートル程度まで巨大化したけど、戦闘後には元の三メートルほどの大きさに戻ってしまった。どうやら『キャスパルク』の姿を維持するには、タイムリミット時間制限があるらしい。

二百年くらい前に拾ったという話だったけど、現状でもまだ幼体だったんだな。伝説の幻獣とまで言われるだけに、きつと寿命も相当長いんだろう。

それにしても、『眷属守護天使』が動物にも反応するとは……

僕に懐いてくれた理由もよく分からないけど、ひよっとして僕の中の神力を感じ取ったのかも？
フィーリア曰く、僕の神力はケタ違いらしいし。

ほか、ドラゴンのプレスからひとつ飛びでソロールを助けたことにより、『縮地』スキルが発現したので取得した。これは高速移動ができる便利なスキルで、もちろんレベル10まで上げておく。
残り経験値5000万ほどをストックして、今回の強化を終えた。

ソロールとの結婚はともかくとして、僕たちはしばらくの間アマゾネス村に滞在することにした。
また旅立つ前に疲労をちゃんと取っておきたいというのもあるけど、次月分の神様の経験値をも
らってから次の行動に移りたかったからだ。

次にもらえる経験値は、10億を超える可能性がある。これをもらって能力強化してから、ここを出発したいのだ。

あまりのんびりとしていられない状況ではあるが、焦りは禁物。
敵は手強い。慌てずしっかりと戦力強化をしておきたいところ。
ということで、僕たちのアマゾネス村での生活が始まった。



「さ……さすが我が夫、あの猿をこんな簡単に退治するなんて……」

村から少し遠出をした場所で、ギガントエイプという体長十メートルもある巨大猿型モンスターと遭遇したので、僕が瞬殺した。それを見たソロールが、感嘆の声を漏らしている。

「だからソロールってば、『夫』じゃないでしょー！」

「そうですね、いい加減にしないと闇魔法で呪いますわよー！」

同行していたリノとフィーリアが、間髪を容れずに抗議。

「分かったよ、ユリー殿って呼べばいいんだろ！ うるさい小娘たちだ」

うんざりとした顔をしながら、ソロールはそう言って軽く舌打ちした。

僕とリノ、フィーリア、ソロール、そしてお供の『村守』様は現在、レベル上げをするために魔物の棲む森まで遠征している。

村の周りには強いモンスターが棲息してないからね。当たり前だけど、危険な場所には村を作らないだろうし。

ということ、注意しながら森の探索中だ。

ここには集団で襲ってくる獠猛なヘルハウンドや、三メートルの長足を持つ大蜘蛛バードレスアラクニドのほか、多足巨虫デビルクロウラー、石化攻撃を使うバジリスク、そして猛毒蛇のアゴニーヴァイパーなど、様々な凶悪モンスターがたくさんいた。

立ち読みサンプル はここまで

それでこそレベル上げ——いわゆるレベリングのしがいがあるというもの。『竜体進化』を習得した僕には毒などの状態異常はまったく怖くないね。

魔道具の素材になるかもしれないので、念のため倒したモンスターの一部も素材として採取している。

ちなみに今倒したギガントエイプは、たまに村の近くまで来ることがあったらしく、どうやって退治しようか頭を悩ませていたとのこと。

せつかくだから、このあともレベル上げついでに危険なモンスターたちを駆除しておくか。

基本的には僕が戦うけど、一応リノたちの戦闘訓練も兼ねているので、比較的弱いモンスターについてはみんなに任せている。今後のためにもここで経験を積んでおきたいのだ。

少し心配ではあるが、『眷女』になった効果でリノたちの基礎ステータスは上がっているし、装備も大幅に強化したので、よほどのことがない限りは大丈夫。

そうそう、先日倒したドラゴンの身体が魔道具用の素材になったので、それでみんなにも強力な装備を作ってあげたんだ。

まずドラゴンの爪から『竜爪の装甲具』を作った。これはまあその、要するにビキニアーマーの強化版である。

基本的にビキニアーマーは防御力度外視の防具で、通常は街の中などで着るファクション装備なのだが、アマゾネスたちはみんなこの防具を着けていた。軽装で狩りに向いているから定着したの

だろう。

アマゾネスが主に狩猟するキングゴボーやブロントバッファローは、身体こそ大きいけどモンスターではない。そのため重装備は必要ないからね。

本当はもつと守備力の高い『竜爪の鎧』を作ろうと思ったんだけど、アマゾネスは重装備を着けないと言われ、仕方なく同じようなものにした。

ただし、『竜爪の装甲具』は防御面積こそ狭いけど、ドラゴンの加護として物理ダメージを軽減する『物理減殺』の効果が付与されているのだ。

これをソロールとアマゾネスたち用に何着か作り、そして僕用には『竜爪の胸当て』を作った。

これにも『物理減殺』の効果があり、軽くて頑丈だ。

鱗からは『竜鱗の盾』を作ることができた。盾としてめちゃくちゃ硬質な上に非常に軽く、そして魔法やプレス攻撃を軽減する『魔法減殺』が付いている。

僕は盾を使わないので、『竜鱗の盾』は全てソロールとアマゾネスたちに贈呈した。

二本の大きな牙からは、『竜牙の剣』が二本作れた。この剣には『炎の剣』のような特殊効果はないが、どんな敵でも断ち斬るほどの凄まじい斬れ味を持っている。これは僕とソロールがもらうことにした。

あとは翼二枚から『竜翼の腕輪』を二個作った。身に着ければ『物理減殺』と『魔法減殺』のシールドを張ることができる。これはリノとフィーリアに渡した。